

9月23日(土) ワークショップ第6室(3号館305)

英語教育におけるコンピューター利用

北陸大学外国語学部 北 弘 志

1. 私の授業

先ず、何らかの形でコンピューターを利用した、私の授業のビデオを見ていただく。
『CALA CAI』『CAI教室でのCAI』『自動翻訳ソフト利用上級英作文』『SPEECH TRAINING SYSTEM 利用発音指導』『英語音声学』

2. 日本の英語教育についての持論を述べる

- ・日本の英語教育はおおむね良い方向へと変わりつつある。
- ・「言語を運用する能力」と「頭脳訓練の能力」との調整。
- ・英語教育の目標と目的をもっともっと絞り込まなければならない。
- ・英語科に求められる「学力内容」を変えなければならない。
- ・学力(英語力を含む)、体力、気力、そして、今新しく『異文化力』
- ・真に学習者の英語教育への意識を直接聴取しなければならない。
- ・(教授者の見た、考えた「学習者中心論」では駄目である)
- ・HIGH-TECH (先端技術)の進歩が、世界を狭くし、日本の英語教育を変えた。(特に、1980年代に入ってから)
- ・良い外国人教師の確保(LL・AET・JTEの三位一体論)
- ・楽しく、分かる授業の実践。
- ・分かり易さへの回帰(教育の原点へ戻れ)
- ・『ループを描く英語教育の創造』(Total Educational System 構築)
- ・今こそ「理論」と「実践」の融合を教室内で実現させよう。
- ・『機器パートナー論』の発揚を。
- ・「役立つ文法」の教授(早くシラバスを示せ)
- ・「英米語」から「国際英語」(日本人英語も含む)への意識転換。
- ・HUMAN INTERACTIONを図ること(教授者と学習者、学習者同士、機器と学習者同士、機器と教授者と学習者、AETとJTEとLL)

3. 「英語CAIに何を期待するか」を述べる

- ・鍛えるべき英語学力を10とすればその内の2か3しか期待しない。
- ・それでもCAIでやるほうが効果的、効率的だからCAIは必要。
- ・特に評価を先に考えたCAIプログラムは存在価値あり。
- ・評価をグラフ化して『英語学習カウンセリング』に資する物が良い。
- ・1年間の授業(ロング・スパン)でCAI教育を設計する事が不可欠
- ・人間教授者が第1のteacher and helperであることを忘れるな。
- ・CSCW(Computer Supported Cooperative Work)、つまり、コンピューターをグループ・インタラクションの媒体として利用する考え方。グループ・ウェアということに着目したい。

研究における先輩諸兄姉のご指導を切に仰ぎたい。